木島 NST 通信 秋号

発行日：2023 年 11 月発行
担当：NST
編集：栄養グループ
内線：350、351

Q. 胃瘻について、自信を持って患者に説明できますか??

2010 年頃から社会全体で広がった「胃瘻バッシング」により、2014 年をピークに年々**胃瘻造設件数は減少**し、さらには **COVID-19 の感染急拡大**の影響で、とある病院では自院だけでなく他院からの**造設依頼件数も著明に減少傾向**（COVID-19 流行前後より約 13%減）にあるとの報告が挙がっています。その背景には、感染症対応のため胃瘻を依頼する医師によって適応患者の割り出しが制限された可能性があることが示唆されました。
また、近年は医師を始め、自信を持って**胃瘻について正しく理解し、造設方法まで説明できる医療者が少ない**というのが現状で、胃瘻造設件数の増加は見込めない状況です。
今回は胃瘻の理解を深めるために、**胃瘻の造設方法**と**よく質問される項目**についておさらいしましょう！

▼経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）

PEG の手技は、胃瘻カテーテルが口腔内を通過する（P 法）か通過しない（I 法）かで大きく2つに分類され、各々の手技用の器機やキットが市販されています。（**※なお、PEG が困難な場合でも外科的に胃瘻は造設可能です。**）

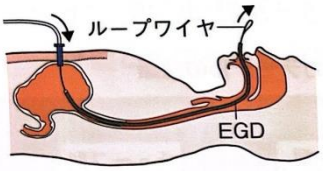
P 法（Pull/Push 法）

→ 口を経由してカテーテルを挿入する方法
開口不能例や上部消化管内視鏡（EGD）が通過しない狭窄例での実施は不可能

①胃瘻造設部位の決定

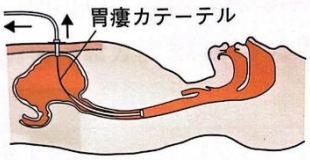
1. 腹壁に穿刺および造設に支障がないか確認
2. 内視鏡を挿入し、強制的に強い光を発信し体表面で透過光を確認
3. 確認部位を体表面から指で押し確認
4. 胃と体表の間に他の臓器がないことを確認後、造設場所を決定

②穿刺（以下 Pull 法）



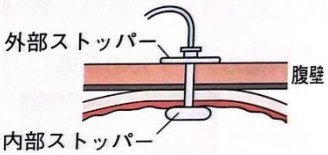
腹壁から胃内へ穿刺針を刺入し、内視鏡を用いてループワイヤーを口から引き出す

③ループワイヤーの連結



ループワイヤーに胃瘻カテーテルを結び付けて腹壁から引っ張り体外へ引き出す

④留置



内部ストッパーが胃壁に引っかかるまで引き出し、外部ストッパーとで腹壁と胃壁を固定する

I 法（Introducer 法）

→ カテーテルを口腔・咽頭を通過させず、腹壁外から胃内腔へ直接挿入する方法

よく質問される事項 Q&A

～ 胃瘻について ～

Q1）ご飯は口からも食べられますか？
Q2）お風呂は入れますか？
Q3）リハビリやスポーツに支障は？
Q4）交換は必要ですか？
Q5）元気になったら元に戻せますか？

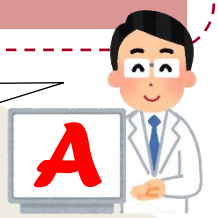
A1）何も支障はありません！
経鼻胃管よりリハビリに適しています

A2）シャワーも湯舟に入るのも、全く支障ありません！

A3）リハビリでも支障はありません！

A4）耐久性はありますが、約４か月～半年に１回交換が必要です

A5）栄養が口から十分に摂れるようになれば除去できます！傷跡も目立たちません



【参考文献】1）「新型コロナウィルス感染症が当院における経皮内視鏡的胃瘻造設術の動向に及ぼした影響についての検討」Med Nutr PEN Lead Vol.7（2023）梶原祐策
2）静脈経腸栄養ナビゲーター（2021）井上善文　他著

正しい胃瘻の知識を伝えることで治療の可能性が広がります

現在、当院 NST では胃瘻造設だけでなく良好な栄養管理を円滑に進めるにあたり、**「季刊誌(NST 通信)」**、**「医療者向け胃瘻の説明書」**の作成や**「NST リンクナース勉強会」**の実施に取り組んでいます。今後、これらの活動を通してスタッフ全体が正しい胃瘻の知識を習得し、患者および患者家族へ伝えることで治療の可能性を広げていきたいと考えています。

木島 NST 通信

医療者向け胃瘻の説明書

NST リンクナース勉強会

NST栄養クイズ

Q. 経皮内視鏡的胃瘻造設術(PEG)を行う場合、正しいものはどれでしょう？

① 全身麻酔　② 局所麻酔　③麻酔なし

A. 皮下までの ② 局所麻酔 で実施可能

PEG 時、胃壁を固定する際に施行
手術自体は胃カメラと造設キットを用いて 15 分程度で終了します

第 31 回泉州地区 NST 研究会で発表しました！

2023 年 11 月 25 日 国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）にて『第 31 回泉州地区 NST 研究会』が開催されました。

今回は、おくのホームケアクリニック 理事 黒川雅史先生による特別講演**「嚥下障害に対してどう対応していくか～多職種連携の重要性～」**を中心に、様々な職種からの発表を拝聴することができました。当院 NST からも**管理栄養士**より 1 題**「胃瘻による経腸栄養管理を経て完全経口移行できた 1 症例」**を発表したためコメントを掲載しています。

参加した NST メンバー

▼患者の QOL 向上に向け、多職種連携の必要性を再認識

栄養 G
久住管理栄養士

5 月に参加した JSPEN に引き続き、当院 NST の活動報告をさせていただく貴重な機会をいただきました。発表させていただいた感触として、EN 管理から経口移行していく難しさを他院の方々も同じように実感されているような印象を受け、特に多職種でのカンファレンスのタイミングや、継続的な経口訓練に対する患者本人のやる気をどのように維持するかについて興味を示されていました。

また、他の方々の発表を通し、患者の QOL 向上に向けた多職種連携の必要性を再認識させていただくことができ、非常に素晴らしい研究会でした。